

六月のニュースレターでは、2015年6月8日(日)から6月28日(日)まで Galerie Iroha において個展を開く日本人アーティスト、瀬川勇太を紹介します。

瀬川勇太(静岡、1988年)は2011年に武蔵野美術大学造形学部、工芸工業デザイン学科を卒業し、間もなく中国に渡り、景德鎮でのインターンシッププログラムに参加。日本に帰国した後、2014年にロンドンに渡り、現在はロンドンのUniversity of the Arts London, Camberwell College of Arts の工芸科のマスターコースに在籍。東京、中国、ロンドンで作品を発表。中国、景德鎮での体験を経て再び日本の陶芸を見直す機会に恵まれて以来、ロンドンの美術大学で新たな陶作品の可能性を追求している。



瀬川勇太さん、アトリエにて

瀬川勇太とはスイス在住の陶芸家、Toshi Takeuchiを通しての出会いでした。彼からのメールには手の平に乗ったミニチュア陶器の画像が添付されていました。あまりの小ささに目を見張り、彼が何故こんなに小さなミニチュアを作っているのか、興味を持ちました。現在制作しているミニチュア作品に辿り着くまでのプロセス、そして現在取り組んでいるテーマについて書き記してくれました。



ミニチュア作品、瀬川勇太作

Uitgave No. 17  
Mei 2015

Colofon

Mamiko Nagatomo  
Hans Langen

“僕は最近とても小さな壺を作っています。僕がどのような経緯でこのミニチュア陶器の制作に至ったか、またどのような思いでこれを制作しているかについては、2011年中国景德鎮での半年間の体験までさかのぼります。”

“日本の大学在学中から中国滞在中も含め、僕はやきものを彫刻のためのマテリアルとし扱ってきました。そしてコンテンポラリーアートの影響を受け、彫刻作品を制作していました。中国では若い同世代の陶芸家たちが、急速な西洋文化移入の影響を受け、西洋のコンテンポラリーアート風のやきものを制作していました。”景德鎮には青白磁や染付の素晴らしい伝統や技術があるのになんとくだらないものを作っているのだろう”と思いました。これは日本や中国の素晴らしいやきものを知り、それを横目にコンテンポラリーアート風の彫刻を制作している自分に、そっくりそのまま返ってくる感想でした。

日本に帰り自分にとって最も魅力的なやきものとはなんであるかを考えました。もともとやきものを始めるきっかけとなるくらい魅力を感じていたのは、大学時代の師である小松誠先生、その関係から大学時代に訪れたスウェーデンのグスタフスベリ製陶所の作家達ヴィルヘルム・コゲやスティング・リンドベリ、ベルント・フリーベリの作品でした。他方では日本の昭和の巨匠達、魯山人や石黒宗麿、加藤唐九郎などの作品に魅かれていました。自分が今後どのような作品をつくりたいのかを考えたとき、リンドベリやフリーベリが制作していたミニチュアに大きな可能性を感じ、これを日本の陶芸のクオリティで制作したら面白いのではないかと、そんな事を考えました。そしてより新しい刺激を受け自分の中で明確なコンセプトを作りたいと考えロンドンの留学を決めました。

2013年夏にロンドンに来て、ロンドン芸術大学キャンバーウェル校でミニチュアを含め、工芸領域における芸術作品のスケールをテーマに研究を始めました。いったいミニチュアはなぜ面白いのか？なぜ自分や多くの人は魅了されるのか？それが大きな問題でした。

工芸における作品のスケールは、人間のスケールと密接に関わっています。通常最も優先されるのはユーザーと作品の関係です。つまり、ユーザーが食べるサラダの量に合わせてサラダボウルの大きさは決定されます。ただ、もう一点重要なものが、アーティストと作品の関係です。例えばロクロをひく時、人間の手の大きさはその造形に大きな影響を及ぼします。同じ大きさの茶碗を手の大きな陶芸家と手の小さな陶芸家がつくった場合、そのロクロ目は全く違う印象を生み出します。僕はこのアーティストの身体と作品の関係に着目しました。僕の最近の作品に足や口でロクロをひくというものがあります。口でひかれた器は、その表面にロクロ目として歯形や唇の跡が残ります。アーティストの身体と作品の新しい関係を探求することで、新しいものが生まれるのではないかと考えています。またこの人間のアクションの痕跡をマテリアルに魅力的に残すことこそ、やきものによる表現の根本ではないかと感じます。

このアーティストと作品の関係という視点からミニチュアを考えた時、ミニチュアの制作とはアーティストの身体で作れる最小への挑戦であるのではないかと思います。

千利休が2畳の茶室待庵を作ったことに関して、“わび茶の心”を超えた最小の探求であったと建築史家の藤森照信は言及していますが(藤森輝信の茶室学)、自分の制作にも同じ最小への挑戦があるように思います。それはやきものの技術の限界に挑むことであり、またその最小限の中でどのような要素を残すのか、やきものとしての魅力を保った最小に人間の身体がどこまでできるのかということだと思います。”



瀬川勇太、製作風景

瀬川勇太は今回の個展ではロンドンの美術大学での2年間の研究を経て、彼のチャレンジの結果のひとつでもあるミニチュア作品を中心にした実験的とも言えるインスタレーションをオランダ、ドルトレヒトのGalerie Irohaで展示します。工芸作品と使用する人間のスケール、作品と制作者であるアーティストの間にあるスケールの関係に焦点を当てて制作された作品。その中にはろくろを足で回す、あるいは手の代わりに口を使って形作るという試みによって作られた作品もあります。それぞれの作品のインスタレーションがどんな風に展開されるのか、とても興味深く、楽しみです。ご高覧頂けたら幸いです。

皆様のお越しを心よりお待ちしております。

長友麻美子

Galerie Iroha



瀬川勇太、製作風景

## 瀬川 勇太 個展

2015年6月7日(日) ~ 6月28日(日)

オープニング・パーティー：6月7日(日) 15:30 ~ 18:00

瀬川勇太 在廊

開廊時間：木～土曜日、11:00～17:00

月の第一と最終日曜日、12:00～17:00

展覧会の案内状、ニュースレターをご希望の方は「案内状と・またはニュースレター希望」としてお名前、住所を明記の上下記メールアドレスまでお知らせ下さい。皆様からのお便りお待ちしております。

Galerie Iroha

Voorstraat 487 3311 CV Dordrecht The Netherlands

Tel. +31 (0)78 611 9835 / fax. 078 611 9836 / info@galerie-iroha.nl / www.galerie-iroha.nl